

大阪大谷大学

平成三十年度 入学試験問題（公募制推薦 前期）

国 語

注意事項

- 一 問題用紙は全部で十二ページです。解答用紙は一枚です。
- 二 解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に記入してください。
- 四 問題用紙は持ち帰ってください。

□ 次の文章を読んで、後の問に答えよ。石之助は摂津国尼崎藩五万石の藩主青山幸督よしまさの子。本文中では若君と呼ばれている。太郎は神谷三郎左衛門の子で、父が石之助の守役（教育係）であったため、五歳の時から石之助に仕えている。なお（ ）の中は、出題者が付けた注である。設問に字数制限がある場合、すべて句読点等は字数に含む。

太郎と石之助とが十五歳になった。そろそろ若君の元服を考えなければならぬ。次席国家老を務めていた神谷三郎左衛門は、江戸にいる主君、青山幸督に何度もタンガン状aをしたためた。

元服後には、將軍に拝謁する（お目にかかる）必要がある。幸督と正室との間には男子がなく、他の側室の子とともに、石之助は家督を継ぐコウホ者bの一人でもあった。

太郎と石之助とは馬術を好んだ。石之助は、よく荒馬を乗りこなす。太郎は、流鏑馬やぶさめ（馬を走らせながら、馬上からの射る技）のような、馬と乗り手が一体となる技に長じている。

二人は、よく遠乗りに出た。石之助の馬は強いが、強引な走りをキョウヨウcされて息を切らす。苛立つ石之助は鞭むちを入れる。太郎は、絶えず馬の調子を見ながら走るの、いつも石之助から遅れてしまった。

先に着いた石之助が、齋いなが一面に生えた小高い岡に腰を下ろしている。紺碧こんぺきの空に、ちぎれ雲が浮かぶ。遅いぞ。戦で遅れをとる」

「申し訳ございませぬ。馬の息が荒うなりまして」

「太郎は、いつもそうじゃ」

石之助が、太陽に向かってカタワdらの石を投げる。

「俺は、父上に嫌われている」

「そのようなこと……」

「三郎左と咲江（神谷三郎左衛門の妻、太郎の母）とが親がわりだ。おぬしは良いのう。俺は目立たねばならぬ。目立って、父上や家臣に俺を認めさせねばならぬ」

抜いた齧を口に入れた石之助が、ペッと唾を吐く。

「みな、俺を粗暴で、人の情けの分からぬやつと思うておろう。そのとおりかもしれぬ。三郎左は、『若君はお一人ではござらぬ。拙者も咲江も、若君とイッシンドウタイ』などとほざく。おぬしも知っておろう。物心ついたころから、そう言われた。だが、それは嘘じゃ。血を分けた子でもないのに、なぜ、そんなことが言える。俺をかわいそうだと同情しているのさ。三郎左にそう言われるたびに、俺は血を分けた親から疎まれていることを思い知らされる」

「父は、そのような」

「よい。三郎左には感謝している。お前と一緒に育ててもらうた。お前には、本当のことが言える。ここを転げ落ちてみようか。怖いかな」

高さは、さほどでもないが、岩肌の多い斜面である。

「危のうござります。もしものことがあれば」

「実は、元服して公方様（將軍）に拜謁することが決まった。俺は、その日に賭けている。父上に、跡取りと認めさせるのだ。太郎、あそこに椎の木が見えよう。あそこまで行って、戻る。競おうぞ。お前が勝てば、家老にしてやる」

そう言うなり、石之助は斜面を駆け降りる。跡を追う太郎の前で転んだが、そのまま転がっていく。

太郎もつんのめりそうになり、1 腰を落としたとたん、尻餅をつく。かまわず滑り降りる。

もう、若君のことは考えない。勝つてやろう、と思う。X で、高慢ちきで、人を人とも思わない、ためらうことも、謝ることもしない、くそつたれめが……。頭の中で考え付くかぎりの悪口を並べながら、石之助を追う。

一瞬の差で椎の木にたどりついたのは太郎。石之助は「まだ、まだ」と言つて、2 太郎を投げ飛ばす。

「戦ぞ」

と言ったなり、ニヤツと笑つて舌を出す。 3 起き上がり、駆け出す石之助を追いかける。

斜面が滑る。草に手をかけ、もがいている石之助の草鞋が切れる。太郎は、その袴を引つ張り引きずり下ろす。四つん這いになつて、這い登る。

石之助が、何か喚きながら、踝をつかむが、かまわず蹴飛ばす。顔に当たつたようだ。振り向くと、唇を切つた若君が、すごい形相で迫ってくる。負けるか、と思つたとたん、 4 滑り落ちてしまう。

5 岡に戻つた二人。結局、すんでのところで石之助が勝つた。

「この勝負に賭けていた。俺が勝つたなら、父上に認められるとな」

荒い息をしながらそう言う石之助の袴は、ずたずたに裂け、血がにじんではいる。転んだときの当たり所が悪かつたのか、太郎の奥歯が抜けた。血のまじつた唾を吐き、舌先で痕を舐める。

④「ならば、私が負けなければ、若君は家督を継げないし、私は家老になれないではないですか」

⑤「そういうことだ。だから、是が非でも勝ちたかつた」

⑤二人の若者が、大声で笑つた。

(中嶋隆「山の端の月」による)

問一 二重傍線部 a と e のカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部①「いつもそうじゃ」とあるが、これは、石之助が太郎の馬術を評した言葉である。太郎の馬術はどのようなものだったのか説明した最も適切な箇所を、本文中から十五字以内で抜き出して記せ。

問三 傍線部②「三郎左には感謝している」と石之助は言っているが、神谷三郎左衛門の言動に対して怒りを覚えることがしばしばあった。

- (1) 石之助の怒りの口調が表れた、三文字の動詞を本文中から抜き出して記せ。
(2) 怒りを覚えた理由を述べた一文を選び、その最初の五文字を抜き出して記せ。

問四 空欄部 には、石之助の性格を表した漢字二字の語が入る。空欄部よりも前の本文中から、最も適切な語を抜き出して記せ。

問五 空欄部 に入る最も適当な語を、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ(同じ記号は二度使えない)。

- ア ようやく イ いきなり ウ あわてて エ ずるずる オ すぐ

問六 傍線部③「ニヤツと笑って舌を出す」とあるが、石之助がこのような仕草を太郎にしてみせたのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 自分のしたずるい行為を戦だからと正当化し、太郎をさらに挑発するため。
- イ 自分は本当の戦のつもりだったので、太郎が油断していたことを嘲るため。
- ウ 自分の方が能力が勝っていることを確信し、太郎に対して優越感を示すため。
- エ 自分が思わず太郎に手を出してしまったのを、恥ずかしく思ったのを隠すため。

問七 傍線部④「私が負けなければ、若君は家督を継げないし、私は家老になれないではないですか」という太郎の言葉は、以前に石之助が太郎に言った言葉と矛盾している。以前の石之助の言葉を、十四字で抜き出して記せ。

問八 傍線部⑤「二人の若者が、大声で笑った」とあるが、なぜ太郎が気持ちよく大声で笑えたのか。必ず「石之助」と「家老」の語を入れて、六十字以内で説明せよ。

【二】 次の A と B の会話を読んで、後の間に答えよ。設問の都合上、原文を一部改変している。なお、設問に字数制限がある場合、すべて句読点等は字数に含む。

A 他人の見ている色が自分の見ている色と同じかどうか、自分が「赤」と呼んでいる色は他人が「赤」と呼んでいる色と本当に同じ色なのか、君は考えたことがあるだろうか。

B とくに考えたことはないけど、同じなんじゃない？

A 根拠は？

B 根拠って……、ぼくは色盲でも色弱でもないから。

A いや、そういうことではなくて。

B どういうことさ。

A 色盲の場合には、赤いものがうまく「赤」と分からずに、実際上の滞りが生じる。しかしいま考えているのは、実際上はまったく齟齬そごをきたさず、赤いものは「赤」と言い、青いものは「青」と言う人、1、私や君のような人だ。会話のやりとり上は何の食い違いもないし、信号に従うことにも不都合はない。2、彼が「赤」と呼ぶ色は、私が見たら「青」と呼ぶ色かもしれない。

B 3、例えば「青い海！」とか言っていて、その人の場合には実は真っ赤な海が見えているかもしれないわけ？

A そうかもしれない。

B じゃあ、その人には海の印象がまるで違うでしょう。寒々しい荒海が煮えたぎる溶岩のように見えたり。

A いや、考えてごらん、①その人の目に溶岩は実はどう映っているか。

B ええと、そうか、溶岩の方がこんどは青白く光って見えるのか。これ、生まれてからずっとそうなんだよね。

A そう想定しよう。

B 生まれつきそうだと、その人にはむしろ青白いものの方が熱い印象を与えて、そして彼はそれを「赤」と呼ぶわけだから、つじつまはあってるわけか。

A そう。そして赤いものの方が冷たい印象を与える。そして彼はそれを「青」と呼ぶ。

B ぼくが「赤」と呼ぶ色とぼくが「黄」と呼ぶ色を混ぜたらそういう人の場合、どうなっちゃうのかな。

A 「赤」と「黄」を混ぜたら「^{だいだい}橙」になるだろう。繰り返すが、実際の会話と行為においては人と^aイツチしている。だが、「橙」と彼が呼ぶ色は私が見たら「^{きぬ}緑」と呼ぶ色かもしれない。

B そうか。つまり、^bダイケイ的に、うまくつじつまがあうようにズレてるもんだから、言葉遣いの上ではわからない。でも、実際は違う色を見ているのかもしれないということか。^②彼の目にこれがどういう色に映っているのか、ぼくには分からない。

A この懷疑は、考えない人は一生考えないのだろうけれど、けっこう考えてしまう人はいる。人によってはかなり早い時期に考えて、嫌な気分になるもののようにだ。

B ぼくはいま初めて考えさせられるんだけど、確かに、なんかやな感じだ。でも、これは色だけにかぎらないよね。例えば、君にとって「ヒリヒリする」ってのはどういう感じ？

A どう答えればいいのか。

B みんな「ヒリヒリする」って言うけど、誰もが同じ感じのことを指しているのかどうか。君が「ヒリヒリする」って言うとき、それはぼくなら「チクチクする」って言うような感じかもしれないし、あるいは、ぼくが感じたことのない変な感じを君は「ヒリヒリする」って呼んでるのかもしれない。

A なるほど、そうだね。

B ^③形はどうかな。

A 例え、君が「三角形」と呼ぶ形は私が「円」と呼ぶ形だとか？

B ちよつと無理か。

A どうして？

B 円じゃあピタゴラスの定理は証明できないだろ？

A しかし、セイゴウ的にズレていけばよいのだから。例え、君が「直線」と呼ぶものが私にはどうみても曲がっていたり。

B でも、曲がってる線を「直線」と呼んだら、定規がきちんとあたらないじゃない。

A いやいや。

B なにさ。

A 定規も曲がってるのだから、だいじょうぶ。

B おお。そういうことか。

A ともかく、幾何学の証明や土地の測量ではつじつまがあっているのだけれど、見えている形は違っているかもしれない。

B すると、君の眼球が歪んだレンズで、ちよつと歪んだ鏡に移した図形で幾何学の証明をするみたいなことになっているわけだ。

A 比喩としてはそういう感じかな。

B そしたらさ、君が「椅子」って呼ぶものがぼくなら「机」と呼ぶものに見えていたり、君が「猫」って呼ぶものがぼくなら「犬」と呼ぶものに見えたりすることもありうるのかな。ぼくには「猫がニャーと鳴いている」「光景が、君の目と耳には、ぼくだったら「犬がワンと鳴いている」「光景に映っていて、でも君はそれこそが「猫」が「ニャー」だと習ったものだから、それをあくまでも「猫がニャーと鳴いている」と描写する。それで、ボロが出ない。頭おかしくなりそうだな。

A そこまでいくとつじつまをあわせられるかどうか心もとないが、いずれにせよ、他人の知覚世界は実のところ私の知覚世界

とまったく異なるものかもしれない、ということだ。

B 面白いけどさ、だから、なんなの？

A え？

B だって、これ、色盲と違って、実生活にはなんの影響もないんでしょ。

A ないね。

B じゃあ、いいじゃないか。

A 本当にそう思う？

B いや……、そりゃ、気持ち悪いけどさ、こんな考え。

A さっきも言ったように、ある人たちは実際こうした懐疑に捉えられて、どうしようもなく落ち着かなくなる。君だって、考えているうちに、^⑥こうした懐疑を私の提案よりも過激な形で捉えるようになった。問題は、われわれがこうして他人の知覚についての懐疑に思い至ってしまうということなのだ。実生活には無関係かもしれない。しかし、こんな懐疑にたどり着いてしまふというのも、きわめて人間的な現象だ。そして、この懐疑に「何か気持ち悪い」と反応するのもまた、きわめて人間的な現象にほかならない。だから、その気持ち悪さから目をそらさずにこの懐疑をもっと見つめてみることで、われわれ自身を知ることができるかもしれない。実際、ここには哲学が問題にすべき何かがある。この懐疑そのものはきっかけにすぎないかもしれないが、これをバネにして何か開けてくるかもしれない。

B 分かった。申し訳ない、^dエンゼツさせちゃって。

A いえいえ、^eごセイチヨウありがとう。

注 齟齬……：くいちがひ。

(野矢茂樹『哲学の謎』による)

ピタゴラスの定理……直角三角形の辺の長さの関係に関する定理。斜辺の二乗は他の二辺の二乗の和に等しい。

問一 二重傍線部 a } e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄部

1

 }

3

 に入る最も適当な語を、次のア } エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ（同じ記号は二度使えない）。

ア すると イ あるいは ウ つまり エ しかし

問三 傍線部①「その人の目に溶岩は実はどう映っているか」とあるが、どう見えるはずか、その色と印象について、本文中の語を使い二十字以内で説明せよ。

問四 傍線部②「彼の目にこれがどういう色に映っているのか、ぼくには分からない」とBは言うが、AにはBの見る色が分かるだろうか。二人の議論をふまえた最も適当なものを、次のア } エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 分かる。
イ 分からない。
ウ 分からないかもしれない。
エ 分かる場合と分からない場合がある。

問五 傍線部③「形はどうか」^ナとあるが、二人が議論した「色」と「感じ」と比べて、どのような見解に達したか、最も適当なものを、次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 色や感じと同様、実際に見えている視覚像は個人間で異なるかもしれない。
- イ 色や感じと同様、実際に見えている視覚像は個人間で異なる場合もある。
- ウ 色や感じと異なり、実際に見えている視覚像は個人間で異なるかもしれない。
- エ 色や感じと異なり、実際に見えている視覚像は個人間で異なる場合もある。

問六 傍線部④「だいじょうぶ」とAは言うが、なぜそう言えるのか。必ず「つじつま」の語を入れて、三十五字以内で説明せよ。

問七 傍線部⑤「比喩」について、Bはどんな種類の比喩を使ったのか、次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 直喩
- イ 隠喩
- ウ 擬人法
- エ 反語法

問八 傍線部⑥「こうした懷疑を私の提案よりも過激な形で捉えるようになった」とあるが、Bはどんな発言をしたのか。それがわかるBの一回分の発言の最初の五文字を抜き出して記せ。

問九 波線部「他人の見ている色が自分の見ている色と同じかどうか」という問題について、Aは「色」だけでなく「感じ」「形」も含めてどういう結論を導いたか、それが述べられた箇所を、本文中から三十五字で抜き出して記せ。